

## *Ethan Frome*における共依存の三角関係

池田志郎

### 序

Edith Wharton (1862-1937) は19世紀後半のニューヨーク社交界の様子を活写した小説 *The House of Mirth* (1905) や *The Age of Innocence* (1920) でよく知られている作家であり、1921年にはピューリッツアー賞を獲得しているが、社会の底辺で生活をする人々にも同情と共感を覚えていた。そのような華やかな社会の影の部分を描いた作品の一つが *Ethan Frome* (1911) である。この中編作品に関しては、出版当初は “There are things too terrible in their failure to be told humanly by creature to creature.” (*Saturday Review* 18 Nov. 1911) などの否定的な評価と、同時代の小説家Henry Jamesの “I exceedingly admire ... *Ethan Frome*. A beautiful art & tone & truth.” (Henry James から Edith Wharton への1911年10月25日の手紙) などのように好意的な評価が入り混じっていた。当時の時代風潮もあるが、批評家たちはこの作品をどう読んで良いのか、まだ迷っていたのであろう。近年では、フェミニズム批評の高まりとともに、再評価が著しい (Goodman, *Feminism Readings of Edith Wharton* 15-25)。

Wharton 自身、この作品は Emily Brontë の *Wuthering Heights* に負うところがあると述べている (*Backward Glance* 79) ように、この小説の物語部分は「物語内物語」という構成をとっており、男の語り手の視点から出来事が語りなおされるという構造になっている。この物語部分は、冬の厳しい寒さと雪に閉ざされたマサチューセッツ州のスタークフィールドが舞台となっており、その地域も中心となる人物たちも貧しく、場所も気候も暗く

厳しいものとされている。中心となる粗筋は「父と母からの精神的影響を強く受けた Ethan Frome が、病気がちの妻 Zenobia (Zeena) のために家事手伝いに来ていたとこの Mattie Silver と心中未遂事件を起こして大怪我をし、最終的に3人で共同生活を送らざるをえない状況になる」というものである。この事件自体は24年前の出来事であるが、ふとしたことから Ethan と出会うことになった発電所建設にかかわる電気技師の語り手が、町の人たちや Ethan 本人からの情報を集めて、この事件にまつわる物語を再構築することで作品が出来上がっている。時代としては、20世紀への変わり目の頃で、鉄道が建設されつつあり、電気の需要が伸び、現代的な生活が始まろうという時期に当たる。

本論考は主要登場人物相互の関係性に注目し、それがどのような関係性を有しているのかを分析しようとするものである。

## 1

最初に、Ethan Frome を見てみたい。この人物は自分の頭の中の考えを言葉に表すのが苦手な人物、いくつかのぼんやりとしたイメージは浮かぶが、それをうまく言葉にできずに黙ってしまうか、さもなければありきたりな言葉を言ってしまう人物として描かれている。批評家 Lee が指摘しているように、“a story of silence and speechlessness, numbness, and dumbness” (375) の中心人物である。

まず、次の引用部分を検討してみたい。大事故から24年後の52歳の Ethan が、語り手の電気技師と「最近の生化学 (bio-chemistry) についてのいくつかの発見」(8) が書いてある大衆科学の本について会話を交わす場面である。

“There are things in that book that I didn’t know the first word about,” he said.

I wondered less at his words than at the queer note of resentment in his voice. He was evidently surprised and slightly aggrieved at his own ignorance.

“Does that sort of thing interest you?” I asked.

“It used to.”

“There are one or two rather new things in the book: there have been some big strides lately in that particular line of research.” I waited a moment for an answer that did not come; then I said: “If you’d like to look the book through I’d be glad to leave it with you.”

He hesitated, and I had the impression that he felt himself about to yield to a stealing tide of inertia; then, “Thank you—I’ll take it,” he answered shortly.

I hoped that this incident might set up some more direct communication between us ... But something in his past history, or in his present way of living, had apparently driven him too deeply into himself for any casual impulse to draw him back to his kind.  
(8-9)

これは Ethan のコミュニケーション能力の欠如を示す好例である。彼は「科学に関心があった」ことは認めながらも、会話を促すための「最近の研究成果」の話題については反応を示さず、本を貸すという申し出についても「躊躇」し、「押し寄せてくる無気力の波」に身をまかせようとしているように見える。語り手はこの本をきっかけとして会話が容易になることを期待するのであるが、ふたりの会話は弾まない。語り手は「無気力の波」と呼んでいるが、Ethan はもともと無口であり、内面的なもの、心に浮かんできたイメージをうまく言葉に表すことができないのである。語り手にもその原因が「過去の出来事か、現在の生活によるものか」理解できないほどである。

彼は若いころに工業大学で1年間のコースを受講し、物理学の実験を手伝ったことがあり、科学には関心を持っていた。それで、冬の夜の澄み切った空気の様子を “It’s like being in an exhausted receiver” (13) のように、真空状態のガラスの壺に喩えてもいる。この比喩から、当時の最先端の実験を手伝っていたことが Ethan の生活に少し影響していることが分かる。しかし、それは30年ほど前の若い頃のことであり、父親の事故によって大学の研究をあきらめてから、Ethan は雪に閉ざされた生活を送って来た。その証拠に、時代から取り残された52歳の彼は、今の時代の最先端科学である

「生化学」についての一般解説書を全く理解できない。そのことが、時代の先端の技術に通じている語り手との会話を成り立たせなくさせる原因と考えることができる。今でもある程度の関心はあり、躊躇しながらも語り手の本を借りるのではあるが、これをきっかけに語り手と話をするようになるかという、そうはならない。Ethanは、今の時代に生きる語り手とコミュニケーションを取るための共通の言葉を見つけることができないために、話をする事ができず、さらには話をする事をあきらめてしまうことになる。Wolffが指摘する“the deep muteness of his nature” (140)の状態である。つまり、Ethanは外界との接触を遮断された「真空の壺」の中で生きているのであり、外部とのコミュニケーションを成り立たせることができない。

## 2

では、若い頃のEthanはどうであったか。24年前の心中未遂事件直前の場面を見てみよう。教会でのダンスに出かけたMattieをEthanが迎えに行き、ダンスの様子を教会の窓からうかがい、それが解散になった後のMattieとの会話を描写した部分は次のように書かれている。

“If you thought I hadn't come, why didn't you ride back with Denis Eady?”

“Why, where *were* you? How did you know? I never saw you!”

Her wonder and his laughter ran together like spring rills in a thaw. Ethan had the sense of having done something arch and ingenious. To prolong the effect he groped for a dazzling phrase, and brought out, in a growl of rapture: “Come along.” (20)

寒い冬の屋外であるにもかかわらず、ふたりの会話はまるで恋人同士であるかのように春の陽気を帯びている。「イーサンはいたずらっぽい、気の利いたことをやったような気分になった。その効果を引き延ばすために、目の眩むような言葉を見つけようとした」のであるが、出てきた言葉は喜びを込めた呻くような「行こう」という言葉にすぎない。EthanはZeenaと結婚し

ているのであるから、Mattie との間に恋人関係を成立させることは許されないことである。それは苦しみであると同時に、Zeena との関係が冷え切っている Ethan にとっては、生きる糧ともなっている。「歓喜の呻き声」という「歓喜」と「苦悩」の両方の感情を表す表現にそのことが見事に描写されている。

では、そもそもこのような性格になった原因はどこにあるのか。それを知るためには Ethan の両親について見てみなければならない。もともと貧乏ではあったが、父親が事故で亡くなってからは、母親の方も精神に異常を来たし始め、手伝いとして Zeena がフローム家へやって来る。結婚前のその頃の状況は次のように描写されている。

There the silence had deepened about him year by year. Left alone, after his father's accident, to carry the burden of farm and mill, he had had no time for convivial loiterings in the village; and when his mother fell ill the loneliness of the house grew more oppressive than that of the fields. His mother had been a talker in her day, but after her "trouble" the sound of her voice was seldom heard, though she had not lost the power of speech. Sometimes, in the longer winter evenings, when in desperation her son asked her why she didn't "say something," she would lift a finger and answer: "Because I'm listening"; and on stormy nights, when the loud wind was about the house, she would complain, if he spoke to her: "They're talking so out there that I can't hear you."

It was only when she drew toward her last illness, and his cousin Zenobia Pierce came over from the next valley to help him nurse her, that human speech was heard again in the house ... After the funeral, when he saw her preparing to go away, he was seized with an unreasoning dread of being left alone on the farm; and before he knew what he was doing he had asked her to stay there with him. He had often thought since that it would not have happened if his mother had died in spring instead of winter ... (29-30)

父親の死後は農場と製材所の負担が増え、続く母親の狂気によって、お喋りであった母親が喋らなくなり、家庭内では言葉が禁じられる。過剰な言葉に支配された生活と、言葉を全く禁じられた生活を交互に体験し、Ethan の

精神も病んでいく。沈黙することも言葉を発することも禁じられた Ethan には、生き残るためには言葉に翻弄されることなく、ただ単に生活を続けることしかなかった。そして、母親の死後、Ethan はその静寂に耐えられなくなり、「自分でも何をしているか分からないうちに」、結局、看護師として手伝いに来ていたいとこの Zeena に結婚を申し込むことになる。だが、この結婚は静寂への恐怖心、「取り残されること」への恐怖心からの結婚であった。したがって、当然 “a terrible marriage” (Lee 380) であり “catastrophe” (Nevius 132) であった。しかし、Ethan はこのスタークフィールドの町から出て行かない。それはちょうど、何かを表現するために素晴らしい言葉を探そうとしても、結局は何も言葉が出てこないのと同じことなのである。現状に不満があっても、それを打破するための行動に踏み出すことはない。この田舎の小さな町では、冬の間、人々が雪に閉じ込められて何もできないのと同じことである。Ethan の場合は特にそれが顕著であると考えられる。Lee の表現を借りれば “the products of their environment” (375) ということになる。

Ethan の母親の死後、Zeena が体調を崩し、いとこの Mattie が家事の手伝いにやって来ることはすでに述べたところであるが、Ethan は次第に彼女に惹かれて行く。作者 Wharton が、その様子を Ethan の視点から “Zeena herself, from an oppressive reality, had faded into an insubstantial shade. All his life was lived in the sight and sound of Mattie Silver, and he could no longer conceive of its being otherwise.” (18) と描写しているように、Zeena は「重苦しい現実」と結び付けられて背景に退き、Mattie の「姿と声」が彼の生活を支配し始めるのである。しかし、先の引用のように、彼はこの感情を直接的に言葉で表現することはできず、歓喜と苦悩の板ばさみになる。

そして、このコミュニケーション能力の欠如が悲惨な事故へとつながって行く。たとえば、Mattie と一緒に西部へと駆け落ちしようと考えて、Zeena に置手紙を書こうとする場面にもそれがよく表れている。

“Zeena, I’ve done all I could for you, and I don’t see as it’s been any use. I don’t blame you, nor I don’t blame myself. Maybe both of us will do better separate. I’m going to try my luck West, and you can sell the farm and mill, and keep the money—”

His pen paused on the word, which brought home to him the relentless conditions of his lot. If he gave the farm and mill to Zeena what would be left him to start his own life with? ...

He drew the lantern nearer and eagerly scanned the fares [on the advertising sheet]; then the paper [the *Bettsbridge Eagle*] fell from his hand and he pushed aside his unfinished letter. A moment ago he had wondered what he and Mattie were to live on when they reached the West; now he saw that he had not even the money to take her there. Borrowing was out of the question ... The inexorable facts closed in on him like prison-warders hand-cuffing a convict. There was no way out—none. He was a prisoner for life, and now his one ray of light was to be extinguished. (54-55)

実際に駆け落ちをして幸せになった男の話を出して、Ethan も同じようにしようと考えを巡らし手紙を書き始める。「Zeena のためにいろいろやってきたが、うまくいかなかった。お前も悪くないし、俺も悪くない。別れた方がお互いのためだろう」と、前向きな考え方で手紙を書き始めるが、Zeena には残せるものが何もないどころか、自分自身も西部へ行くお金さえないことに気付き、結局は計画を断念せざるを得なくなり、手紙を書くことを止めてしまう。つまり、自分の考えを表現することを止めてしまうのである。行動を起こす前に、生活の重荷という刑務所から逃げ出すことのできない「終身刑の囚人」として、惨めな生活を送らねばならないことがはっきりと想像でき、それから先に進むことができない。彼にとっては現在の状況も、そして未来の状況も、「出口のない閉塞状況」であることが分かる。またしても、それは雪に閉ざされた冬のスタークフィールドの状況と同じである。ただし、このことは Ethan にとっては好都合であったかもしれない。行動を起こすことが無意味であると分かったからには、スタークフィールドで生活続けるしかない。つまり、もはや行動を起こす必要がないことが歴然としているのであるから、考えることも、言葉を探す必要もなくなったのである。ただ黙々と生き続けるしかないということである。

先に述べたように、Ethan は、Zeena とは自分の考えも分からないままに、静寂に耐え切れずに結婚してしまった。したがって、手紙に一旦書いたように、Zeena とは「別れた方がお互いに良い」と分かっているとしても、結婚の責任は Ethan 自身にある。たとえ、後述のように、そこに Zeena の策略があったとしても、である。また、「母親がなくなった時期が春であったならば状況は変わっていたであろう」と考えることもあるが、これも口実にすぎない。Ethan には母親の代わりになる人物が必要なのであり、母親の死が暖かい春であったにしても、結局は同じことになっていたと思われる。「取り残されることの恐怖」から救ってくれる Zeena は身近な存在であり、彼女が病気がちであることは Ethan の存在意義を高めてくれもする。つまり、自分の生きる意味は Zeena にあることが分かる。こうして、結局、彼は Zeena にも依存して生きて行くしかないのである。つまり、Wolff が指摘しているように、Ethan と Zeena は、“mutual commitment to the habits of care-taking” (141)、つまり「相互扶助」の関係にあると言える。これは「共依存」と呼び変えてもよいであろう。

「共依存」とは臨床心理学の分野で使われている言葉であり、きわめて単純化して言うと、たとえばアルコール依存症などの場合に、「アルコール依存症者が妻をふりまわしながら依存を深め、妻はその夫にケアを与え続けることで自分に依存する夫に依存する」という構図（信田 49）である。同じ構図が Ethan の場合にもあてはまる。発展的な方向ではなく、マイナスの方向へと向かう相互依存の関係がふたりの間に存在しているのである。

### 3

次に Mattie Silver の場合はどうであろうか。フローム家にやって来た当初は、彼女は20歳と若く、活発で明るい性格をしており、何かにつけ、Zeena と対照的な人物として描写される。彼女は、ちょうど Zeena が Ethan の母親の看病のために手伝いに来たのと同じように、病気がちになった Zeena の身の回りの世話をするためにフローム家にやって来るのである。その名前が示すように、彼女の明るさは、Ethan には喜びと希望になり、

Zeena には苦痛の種となる。先述のように、「歓喜と苦悩」をもたらす人物ということになる。また、Ethan と Mattie がお互いに好意を寄せていることは何度も暗示されるのだが、それが直接的に言葉に表されることは事故の直前までほとんどなく、ふたりのしぐさや言葉の行間を読み取ることによるのみ察知されるものである。

最初にふたりの関係がそれとなく示されるのは、教会でのダンスの帰りの場面である。Mattie が結婚することになったら、フローム家を出ていくことになるだろうという話題を Ethan が持ち出した時のことである。

She turned on him with a sudden flash of indignation. "You'd ought to tell me, Ethan Frome—you'd ought to! Unless you want me to go too—" ....

"I guess we'll never let you go, Matt," he whispered, as though even the dead, lovers once, must conspire with him to keep her; and brushing by the graves, he thought: "We'll always go on living here together, and some day she'll lie there beside me."

He let the vision possess him as they climbed the hill to the house. He was never so happy with her as when he abandoned himself to these dreams. Half-way up the slope Mattie stumbled against some unseen obstruction and clutched his sleeve to steady herself. The wave of warmth that went through him was like the prolongation of his vision. For the first time he stole his arm about her, and she did not resist. They walked on as if they were floating on a summer stream. (21-22)

Mattie は急に腹を立てて、まるで Ethan の母親であるかのように、“Ethan Frome” という名前を使って彼を叱り付ける。これは Ethan を操る際に非常に効果的なやり方である。事実、これは奏功し、Ethan は母親に叱り付けられたときのように、ぼそぼそと呟くことしかできない。また、その時に彼の頭の中に浮かぶ将来のイメージは、ふたりの将来を明らかに暗示するような「僕たちはいつも一緒にここで暮らし続けて、いつかは彼女は僕の傍らに眠るだろう」というものである。生きていくために、Ethan には支えるべき対象が必要であり、それは母親でも Mattie でも、また Zeena でも良い。

自分が必要とされることが彼の生きる糧なのである。この場面では、Mattie と母親のイメージが重なって Ethan に覆いかぶさっているように見える。Wharton 自身が認めているように、それはちょうどスタークフィールドの冬の重苦しい雪のようでもある (*Backward Glance* 68)。

ふたりが丘を上って家路に就くときに、彼はそんな夢に身を任せ幸せを感じているが、坂道の途中で Mattie が何か目に見えないものに躓き、倒れまいとして彼の袖を掴む。その瞬間、暖かい波が彼の体を通り抜け、初めて彼は彼女に腕をそっと回し、彼女もそれを拒否しない。ふたりは幸福感にあふれ、非常に寒い冬の夜であるにも関わらず、「まるで夏の小川の上を漂うように」歩き続ける。ここは、お互いに好意を抱いていることを示す場面である。もちろん、この場面で躓いた「何か目に見えないもの」とは、目に見えない Zeena の存在である。後述するように、このふたりの親密度が増しそうになると必ず、Zeena を暗示するものが登場したり、Zeena に関わる出来事が起こったりする。

しかし、これは同時に、Mattie が Ethan の運命を狂わせてしまう「運命の女」であることをも暗示している。財産も身寄りもない Mattie にとって、この時代の男中心の社会でひとりで生活していくことは容易なことではない。以前、店員の仕事をやったこともあったが、体を壊してしまい、無理ができなくなってしまった。その結果、簡単な家事くらいしかできなくなり、誰かに頼って生きて行くしかなくなったのである。そういう状況にあると、とりあえず身近にいて頼ることができるのは、それほど年も離れていない Ethan ということになる。確実に自分の味方をしてくれることが分かるので、与しやすいのである。このような Mattie を取り巻く社会状況に関しては、Chambers も作者自身の社会に対する認識だとして “Wharton’s awareness of the ways women are rendered powerless” (23) と指摘しているが、彼女もまたその犠牲者とも言えるであろう。

このスタークフィールドのような片田舎では、特に、まだ電気も十分に来っていないような場所では、人々の考え方は極めて保守的であり、女性は淑やかであることが求められていた。20歳の Mattie は、新しい時代の若者たちがそうであるように、新しい考え方をもち始めていた。教会のダンスに出か

けたり、同じ年ごろの男の若者たちと冗談を言い合ったりもしている。それでも、こと恋愛のこととなるとやはり保守的であり、女の方から恋愛感情を直接的に表現することはタブーであった。Mattie にできることは、冗談と本気のどちらにも考えられるような言い回しで、自分の気持をそれとなく相手に知らせること位である。幸運なことに、Ethan の場合は恋愛感情を抱いてくれたので、暗黙のうちに共通認識が出来上がっていくことになる。

Zeena が診察のための小旅行から帰って来たあと、いよいよ Mattie がフローム家を出て行かなければならなくなり、駅へ行く前にふたりで櫓に乗ることにする。その場面ではお互いに直接的に感情を爆発させている。

“Is this where Ned and Ruth kissed each other?” she whispered breathlessly, and flung her arms about him. Her lips, groping for his, swept over his face, and he held her fast in a rapture of surprise.

“Good-bye—good-bye,” she stammered, and kissed him again.

“Oh, Matt I can’t let you go!” broke from him in the same old cry.

She freed herself from his hold and he heard her sobbing.

“Oh, I can’t go either!” she wailed.

“Matt! What’ll we do? What’ll we do?”

They clung to each other’s hands like children, and her body shook with desperate sobs.

Through the stillness they heard the church clock striking five.

“Oh, Ethan, it’s time!” she cried.

He drew her back to him. “Time for what? You don’t suppose I’m going to leave you now?”

“If I missed my train where’d I go?”

“Where are you going if you catch it?”

She stood silent, her hands lying cold and relaxed in his.

“What’s the good of either of us going anywheres without the other one now?” he said.

She remained motionless, as if she had not heard him. Then she snatched her hands from his, threw her arms about his neck, and pressed a sudden drenched cheek against his face. “Ethan! Ethan! I want you to take me down again!”

“Down where?”

“The coast. Right off,” she panted. “So ‘t we’ll never come up any more.”

“Matt! What on earth do you mean?”

She put her lips close against his ear to say: “Right into the big elm. You said you could. So ‘t we’d never have to leave each other any more.” (67-68 下線は引用者)

ふたりは「お互いがいないと生きてはいけない」存在だと告白し、別れを惜しむ。しかし、この引用部分に描かれた Ethan の言葉（下線部分）に注目してみると、彼はしきりに Mattie を引き留めようとしているように見える。具体的には、「マット、君を行かせやしない」、「マット、どうしよう、どうしよう」、「何の時間？君を行かせるなんて思っていないだろうね？」、「列車に間に合ったらどこに行くんだ？」、「今じゃ、ふたりのうちの一人がいないのに、どこへ行ったって仕方がないだろう？」、「どこを滑るって？」、「マット、どういう意味だ？」などであるが、よく見てみると、これらの反応は Mattie の言葉とうまくかみ合っていないことが分かる。Ethan の言葉からはまるで Mattie が自分の意思で彼のもとを去っていくような印象を受ける。このような重要な部分でも Ethan のコミュニケーション能力不足が露呈してしまうのである。

汽車の時間がやって来て、もう駅に行かなければならないという時になると、Mattie が心中をもちかける。彼女は、ふたりで橋に乗って楡の木にぶつかれば死ぬことができるので、もう離れ離れになることはないと言って、Ethan を説得するのである。最初、Ethan は拒否するが、すでに見てきたように、彼は外部要因には最終的には逆らわないことが分かっている。結局、説得を受け入れ、ふたりで楡の大木に向かって橋を滑らせることになり、こうして Mattie は Ethan を破滅へと導いていくのである。

したがって、陰鬱なフローム家に明るさをもたらした Mattie は、一見無邪気な天使のようにも見えるが、実は Ethan にとっては非常に危険な人物であることが分かった。Mattie の発話は恐ろしい罠として機能していたのである。その証拠に、事故後24年たってフローム家で3人で生活している Mattie を見てみると、全く輝きはなく、悪い魔法使いのような様子に描か

れている。Lee が指摘するように “a second Zeena” (377) の状態になっているのである。

こうして Ethan はふたりの女たちの面倒をみることになる。もちろん、Mattie は体の自由が利かなくなっているので Ethan と Zeena に依存して生きて行くしかないのであるが、先の引用部分「僕たちはいつも一緒にここで暮らし続けて、いつかは彼女は僕の傍らに眠るだろう」と照らし合わせて見ると、これは Ethan の希望がかなったということでもある。彼には Mattie が必要だったし、Mattie には彼が必要なのである。ふたりはお互いに依存しあって生きて行くことになる (Wolff 142)。

#### 4

最後に、Ethan よりも 7 歳年上の妻 Zeena と他のふたりとの関係に注目してみたい。Ethan が 27 歳の時には Zeena は「既に年老いた女だった」(she was already an old woman) (28) との描写がある。これは彼女の容姿や顔のしわなどから判断した結果であるが、この観察は Ethan の眼によるものであり、多分に Mattie を意識した結果、彼女と比較した結果の描写である。しかしながら、前述のように、Ethan にとっては Mattie は「第二の Zeena」であり、「母親」の役割も持っていることを考え合わせると、この Ethan の観察から彼自身が Zeena を「母親」視していることが分かる。彼にとって Zeena は、Mattie のような恋愛の対象ではなく、いろいろと指図をする「母親」なのである。その証拠に、Zeena も口数は少ない方だが、Ethan に対しては自分の意見を必ず強く主張する強情な人物である。Ethan と喧嘩になったときには、自分がこんなに健康を害してしまったのはどうしてかとか、どういう経緯で Ethan と結婚したのかなどということを持ち出し、彼が反論できないように追い込んでしまうのである。

たとえば、次の引用を見てみよう。診察してもらった医師から、Zeena の看病をしてくれる新しい手伝いの女の子が必要だと言われたと彼女が主張する場面である。

Of late there had been other signs of her disfavor, as intangible but more disquieting. One cold winter morning, as he dressed in the dark, his candle flickering in the draught of the ill-fitting window, he had heard her speak from the bed behind him.

"The doctor don't want I should be left without anybody to do for me," she said in her flat whine.

He had supposed her to be asleep, and the sound of her voice had startled him, though she was given to abrupt explosions of speech after long intervals of secretive silence.

He turned and looked at her where she lay indistinctly outlined under the dark calico quilt, her high-boned face taking a grayish tinge from the whiteness of the pillow.

"Nobody to do for you?" he repeated.

"If you say you can't afford a hired girl when Mattie goes." ...

"And the doctor don't want I should be left without anybody," Zeena continued. "He wanted I should speak to you about a girl he's heard about, that might come—" (17)

ここで Zeena は、Ethan が反論できない権威として医師を登場させている。Zeena には薬や医師の診察が必要なのであるが、実際に彼女が取り寄せている薬は通信販売で購入しているものである。この時代には、「薬」と称されていてもその効能は非常に疑わしい民間治療薬を信用する者も多く、彼女が取り寄せて服用している薬も本物の効き目がある薬ではない可能性が極めて高い。アルコールを主成分として、服用すると体が温まり、効能があるような気にさせられてしまう「薬」なのである（4の注釈4）。いわゆる「万病に効く」類のいかがわしいものである。また、同じように、診察を受けた医師に関しても詳しい情報はなく、真偽のほどもわからない噂で伝わってきた情報にすぎない。そうではあっても、Ethan には、また、このスタークフィールドという特殊な町の住人にとっては、それは十分に信用するに足る情報なのである。

また、実際に Zeena がその医師の診察を受けたかどうかは作品中には明確に書かれてはいないのであるが、Zeena にとっても、また Ethan にとってもさえもそれは問題とはならない。その道の「権威」の発言は否定しようがないからである。それが Zeena の最大の強みである。また、「結婚して1年

とたたないうちに『病身』を募らせてしまい、それ以来、病気の例にかけては豊富なこの町でも目立つ存在になった」(within a year of their marriage she developed the “sickliness” which had since made her notable even in a community rich in pathological instances) (30) という記述があるように、彼女ほどこの町で多くの病気を持っているものはいないとされているが、それは病気の症状に関しての言わば専門家、つまり「権威」だということになる。病気でない者にはその症状は理解しようがないのであるから、他の者にはそこに疑問を差し挟む余地はない。“sickliness”と表現されているだけであり、実際の病気の真偽のほどは不明であるが、最初から Zeena は病弱な人物として登場し、遠くの実際にはいかがわしいような会社から「薬」を取り寄せて服用し、噂を信じて診察を受けに行ったとしても、非難のいわれはない。この時代、そしてこのような田舎では、いい加減な「薬」、素性の知れない「医者」であっても、十分に「権威」として通用したのである。

また、彼女に看護師の経験があるということも彼女に権威を与えている。それは専門的な知識と能力があるということを示しているからである。それらを持たない Ethan には反論のしようがない。その彼女が手伝いの女の子が必要だと言いだす場面を見てみよう。

“Oh, Dr. Buck—” Ethan’s incredulity escaped in a short laugh.  
“Did Dr. Buck tell you how I was to pay her wages?”

Her voice rose furiously with his. “No, he didn’t. For I’d ‘a’ been ashamed to tell *him* that you grudged me the money to get back my health, when I lost it nursing your mother!”

“You lost your health nursing own mother?”

“Yes; and my folks all told me at the time you couldn’t do no less than marry me after—”

“Zeena!” ...

It was the first scene of open anger between the couple in their sad seven years together, and Ethan felt as if he had lost an irretrievable advantage in descending to the level of recrimination.

(46)

診察を受けた地元の Buck 医師にもフローム家の窮状は分かっているはずだとでも言うように、Ethan は手伝いの女の子を雇う話を笑い話にしようとするが、それを聞いて Zeena は激昂する。自分の健康が優れないのは Ethan の母親を看病したせいだと言い、「私の健康を取り戻すためにはお金を出し惜しみする」と言いがかりを付け、さらに、7年前のふたりの結婚の経緯にも言及し、「私の家族はみんな、こうなったらあなたは私と結婚するしかないだろう」と言っていたと言い、Ethan を徹底的に叩きのめす。「みんなが言っていた」とは権威を示すものであり、これも Ethan には反論できないものである。また、Zeena が病気がちであるということは、家族であれば何にかけてでも守ってやらなければならない状態にあるということであり、誰も強く反対することはできない。つまり、Ethan が Zeena に冷たくすることなどできない構造が出来上がっているのである。権威を持たない者は反論できないという弱点があるだけでなく、Ethan の場合には言葉が見つからないので、“Zeena” と大きな声を出すことしかできない。このようにして、Mattie もそうであったが、Zeena は Ethan の母親としての立場を獲得することになる (Goodman, *Edith Wharton's Women* 76)。したがって、前述のように Ethan の眼から見ても「母親」に見えるだけでなく、Zeena 自身も「母親」としての役割を発揮するようになって来るのである。

また、この喧嘩によって Ethan は「優越性を取り返しのつかないものにしてしまった」と感じているが、それはこの7年間辛うじて Ethan が保持していたと思われる男としての権威や誇りが粉碎されてしまったことを示していると考えられる。こうして、Zeena は自分の「病氣」を人質にして生活の主導権を握り、“a joyless hypochondriac” (Lee 376) になってしまう。渡辺は、Zeena にとっては「妻の座」も自分を優位にする要因になっていると指摘している (105) が、確かに、Zeena の立場からすると、妻であることで Ethan は Zeena を家から追い出すことができないということになる。しかし同時に、Ethan の視点に立つと、それは通常の意味での「妻の地位」というのとは少し違う様相を呈する。先の引用で見たように、その地位はいわば Ethan から無理やり強奪したようなものである。したがって、彼と Zeena の間には、通常の結婚という愛情によるつながりはない。

このふたりをつなぎとめているのはお互いへの依存関係であり、自分が必要とされる位置である。そのことをはっきりと示しているのが Zeena の立場を明らかにしている次の描写である。

Zeena's native village was slightly larger and nearer to the railway than Starkfield, and she had let her husband see from the first that life on an isolated farm was not what she had expected when she married. But purchasers were slow in coming, and while he waited for them Ethan learned the impossibility of transplanting her. She chose to look down on Starkfield, but she could not have lived in a place which looked down on her. Even Bettsbridge of Shadd's Falls would not have been sufficiently aware of her, and in the greater cities which attracted Ethan she would have suffered a complete loss of identity. (30)

Zeena に必要なものは自分が操るべき対象であり、同時に、蔑むべき対象なのである。彼女のプライドとアイデンティティに関わる町の大きさ（あるいは、小ささ）であり、健康の対極にある不健康である。また、同じ意味で、自分に対する同情でもある。しかも、これらの条件は巧妙に粉飾され、もっともらしい理由をつけられて Zeena を有利な立場に立たせるのである。Zeena の発言と行動は自分自身を守るための隠れ蓑として機能していると言うことができる。そして、Zeena の求める条件を十分に満たしてくれるのが、Ethan であり Mattie なのである。

24年前の橋の事故以降、3人の奇妙とも言える共同生活が始まる。「病気がち」で体が弱っており、身の回りの世話をしてくれる女の子を必要としていた Zeena が、Ethan と Mattie の世話をするのである。額に傷を負い、脇腹も傷めている Ethan と、首から下の自由が利かなくなっている Mattie の面倒を見ることが、Zeena の生きがいとなる。一番病気がちであった Zeena は相変わらず通信販売の「薬」を飲みながらも、自分よりも劣勢な立場にあるこのふたりの面倒を見ることによって充実した生活を送っており、彼女の自尊心は保たれているのである。それは、決してふたりのことを心配してのことではなく、自分自身の優越感のためである。さらに言うならば、介護す

る対象を獲得した Zeena は、生き生きとした生活を送っており、もはや病気がちである必要はないように思われる。つまり、彼女が「病気がちである」必要性は、自分の居場所を確保するための手段だったのである。彼女はもともと健康であったのだが、Ethan の母親の看病という自分の役割が終わった後、どこにも行くあてがなくなった。しかし、「病気がち」になることで Ethan を手元に引き留め、「母親」の役割を果たすことができるようになったのである。

### 結び

以上見てきたように、3人それぞれに必要なものがあり、奇妙な関係であるにも関わらず、そこには不思議な調和があることが分かった。

コミュニケーション能力に欠ける Ethan に必要なものは、「終身刑の囚人」として生きなければならない現在のこの苦しみを責任転嫁できる対象である。誰かのせいでできれば問題はある程度解決する。何かの口実が必要なのである。何かに依存しながら、しかもそれを口実にしなければならないという矛盾した論理が彼にはある。彼が自分の望む状況を言葉を使ってうまく表現できないのも、そこには矛盾が存在するからだと言える。もし、論理的思考が可能であるならば、Ethan は自分の非論理性に気付いてしまい、現在の状況の中で生きて行くことは困難になる。したがって、責任転嫁ができるものであれば、それは冬の寒さでも、人間でも、スタークフィールドという場所でも、何でも構わない。心中未遂事件のあとは Zeena と Mattie の3人で暮らすことになるが、Ethan にとっては、この苦しい状況から逃げ出せない、逃げ出してはならないもっともな理由ができたことは、むしろ好都合であった。他の若者たちがこの町から逃げ出したのとは違って、たとえそれが自己欺瞞であろうとも、彼にはこのスタークフィールドで生活し続けなければならないもっともな理由が明確になったのである。だからこそ、ふたりの女たちを支えることに人生の意味を見出だし、満足感を得られるのである。逆の見方をすると、彼の人生は、ふたりの面倒をみななければならないという義務感に大きく依存しており、そこに愛憎関係があったとしても、バランスが保

たれているということになる。このふたりの存在がなければ、Ethan は「取り残され」、静寂の恐怖におびえながら生きて行かねばならなくなる。

Mattie の場合は「運命の女」として Ethan の人生を左右し、心中は失敗に終わったが、Ethan と生活するという目標はどうか達成されたことになる。また、彼女の体が不自由であるということが Ethan と Zeena に生き甲斐を与える結果になっている。ふたりに依存しながらも、同時に、ふたりに依存関係を許している立場にある。また、Zeena の場合は、嫌悪すべき対象、蔑むべき対象を獲得し、それを庇護することに自分の存在価値を見出している。自分が必要とされることが彼女の人生における意義なのである。彼女もまた、ふたりの面倒をみる立場にあるという自分の価値に依存しており、その意味でふたりに助けられていることになる。

フローム家で生活する 3 人は、お互いに愛憎関係にありながらも、そこから抜け出すことができない奇妙な共依存関係でつながっている人間たちということになる。それは単なる男女の三角関係ではなく、お互いを蔑みながらも依存せざるを得ない「共依存の罟」の関係にあると言わなければならないだろう。そこには、これまで作者 Wharton が描いてきたアメリカの上流階級と同じ構図を見ることができる。この作品に描かれたマサチューセッツの田舎の人間関係は決して特殊なものではなく、社会階層とも関係がなく、どこでも起こりうる人間関係だと言えよう。

## 引用参考文献

- Chambers, Dianne L. *Feminist Readings of Edith Wharton*. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- Goodman, Susan. *Edith Wharton's Women*. Hanover: UP of New England, 1990.
- James, Henry. "Henry James to Edith Wharton." Eds. Kristin O. Lauer and Cynthia Griffin Wolff. *Ethan Frome*. New York: W. W. Norton, 1995. 85-86.
- Lee, Hermione. *Edith Wharton*. London: Vintage, 2008.
- Nevius, Blake. "On *Ethan Frome*." Ed. Irving Howe. *Edith Wharton*. Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1962. 130-36.
- Saturday Review* [England] (18 November, 1911). Eds. Kristin O. Lauer and Cynthia Griffin Wolff. *Ethan Frome*. New York: W. W. Norton, 1995. 119-20.
- Wharton, Edith. *Ethan Frome*. Eds. Kristin O. Lauer and Cynthia Griffin Wolff. New York: W. W. Norton, 1995. この版をテキストとして使用し、引用頁数はカッコに入れて示した。
- . *A Backward Glance*. 1934. Intro. Louise Auchincloss. New York: Simon & Schuster, 1998.
- Wolff, Cynthia Griffin. "The Narrator's Vision." Eds. Kristin O. Lauer and Cynthia Griffin Wolff. *Ethan Frome*. New York: W. W. Norton, 1995. 130-45.
- イーディス・ウォートン 『イーサン・フロム』宮本陽吉他訳 荒地出版 1995年。  
日本文の引用はこの版を参考にした。
- 信田さよ子 『苦しいけれど、離れられない 共依存・からめとる愛』朝日新聞出版 2009年。
- 渡辺和子 『『イーサン・フロム』と『夏』』別府恵子（編著）『イーディス・ウォートンの世界』鷹書房弓プレス、1997年、99-123。

## Co-dependency Trap in *Ethan Frome*

Shiro Ikeda

### SYNOPSIS

This essay examines the relationships of the three main characters in Edith Wharton's *Ethan Frome* (1911). Apart from the narrator who reconstructs the events, the main characters are Ethan Frome, Zenobia ( "Zeena" ) Frome, and Mattie Silver. A critical sled accident occurred twenty-four years ago, when Ethan was still twenty-eight, Zeena thirty-five, and Mattie twenty, and now they are all living together in a house.

Ethan has something to say on many occasions, but he cannot express his ideas verbally and almost always just mumbles a few words. Because of his lack of communication, he cannot establish a good relationship with other people. Although he has affectionate feelings toward Mattie, his fancy of spending time with her simply whirls around in his mind. One such occasion, a devastating one in his life, is the accident. He is persuaded by Mattie to slide down a slope in the sled into an elm tree.

Mattie is young and cheerful. She gives a lively air to the Fromes, which attracts Ethan so much that he feels great affection for her, but it also gives Zeena a sense of crisis for her peaceful life as Ethan's wife. Mattie tries to take advantage of him to secure her position as his "wife" in the future. As she is poor, with no relatives except for Zeena, she has to grab any chance to survive in the rural society. And the easiest possible target is Ethan. However, paradoxical as it is, the sled calamity and her injury in it result in securing her position as a protégée in the house of Ethan Frome.

Zeena's marriage to Ethan was not based on mutual affection. Just as Mattie, she just wanted her position as a wife legally. Her status is also supported by quasi-medical authorities, like medicines from an uncertain company and "diagnosis" from a doctor who is famous only in rumors. She knows that these are effective enough to make Ethan believe her physical situation and take care of her. In this way she assumes complete control of the house. What she needs in her life is something to control and something to despise.

Analysis of the three main characters' relationships makes clear that they are in a co-dependent triangle. They need each other to live, to support, and to be supported in the strange relationships of co-dependency trap of human behaviors.